

ずいそう

社史(清水建設二百年史)の編纂を終えて

三戸 靖之



清水建設は初代清水喜助が文化元年（1804年）江戸・神田鍛冶町で業を興して、今年で創業二百年を迎えた。二百年記念事業の一環として計画された二百年史の編纂には五年前から取り組んだ。

これまで当社は、百五十年史、百七十年史、百八十年史を上梓してきたが、これで社史は四度目となる。今回は二百年という節目でもあり、新しく収集した資料も加え、創業以来二百年にわたる当社のあゆみを新たに記述した。

当初の2年半は、資料の収集と稿本（社史編纂の素材となる原稿）作りを行い、その後本史の編纂にとりかかった。



編纂に当たっては「社史は何のために作るのか」「どういう社史をつくるのか」を議論した。

「何のために」は、お客様に読んで頂いて当社を理解していただく、社員が会社の歴史をよく理解する、起きた事実をできるだけそのまま記述し今後の経営に役立てることを念頭に作ることにした。

また、「どういう」では、シミズらしい社史、すなわちお客様と諸先輩にたいする感謝と共に、単なる過去の記録ではなく、「論語と算盤」や「顧客第一」「信用第一」といった、当社が創業以来貫き通してきた経営理念や当社の生きざまを反映した内容、「匠の技と心」を重んじ、伝承技術と進取の技術導入・開発による、ものづくりへのこだわりとその伝承、単なる資料集ではなく学術性の高い、社内外の関係者に読まれる社史作りを目指した。

本史の構成は経営の歴史をまとめた「経営編」、建設の設計と現場と技術をまとめた「生産編」、それらの成果を写真集でまとめた「作品集」の三部構成とした。さらに本史とともに、読み物風のエポック史を作ることとした。エポック史は200年の時間軸の中からエポックとなった大きな出来事やプロジェクトとその技術を50項目のテーマにまとめた。

編纂を終えて感じるのは、大工から棟梁へ、棟梁から請負業へ、請負業から建設業へ、建設業から総合建設業への発展のあゆみが、各時代に建設の機械化をはじめとした欧米の近代建設技術と経営を学びつつも、その一方で欧米に類をみない強力な設計機能、研究開発機能、エンジニアリング機能までもあわせ持つ、特異な発展を遂げた日本の総合建設業の歴史に重なって、あらためて先輩達の努力、お得意先の厚いご支援、そして二百年という重みであった。

江戸の後期に確立した棟梁という職能は、自ら設計・調達・一括施工・保全という建物のライフサイクルにかかわる全ての機能を一身に背負った存在に成長していた。

明治維新になって、J.コンドル等の外国人建築家が日本で活躍し、彼らに学んだ辰野金吾や横河民輔等の欧米流の建築家が設計、監督、分業請負を行う生産方式を主導するなかで、一式請負を主張し自前の設計集団を育て、棟梁という職能を明治維新後の西洋建築生産の中でも持ち続けた強い意志をそこに感じるのがある。

そして棟梁から総合建設業へ、シミズの力を発展させるために常に新しい知識・技術に対し飽くなき追求を続けてきた、諸先輩方の進取の精神と真摯な努力に尊敬の念を禁じえない。

創業以来、時代は江戸、明治、大正、昭和から平成へと移行、その間、明治維新、関東大震災、昭和の大不況、戦中・戦後の苦難、高度成長、オイルショック、低成長、バブルそしてバブル崩壊と建設投資の減少等々を通して多くの危機に遭遇しながらも、それを乗り越えてきた歴史でもある。



会社生活を卒業したら、作品集に収録した先輩達の努力の結果である作品群をゆっくり訪ねる旅をしたいと思っている。

—ひと やすゆき 清水建設株式会社取締役専務執行役員—